

ふもとくまの熊野
筆道資料の探訪

芸州筆の発展

現在日本一の生産量を誇る熊野筆も廃藩置県のころ（明治四十五年）までは他国で芸州筆と呼ばれていました。

この筆がどんな種類のものか、芸州筆と認められる現物が無く詳しく説明することは出来ません。しかし熊野町ではごく最近まで筆結（筆を造る職人）のことを筆まきと呼んでいました。このことから、初期の芸州筆はおそらく巻筆であったと推定されます。

熊野村における芸州筆の生産は天保五年（一八三五）から約二十年ほどで軌道に乗り、安政

年間には確実に発展を遂げています。

神山神社（大宮八幡宮）の参道に並ぶ石燈籠や九十九段の石段の寄進者たちの中に、本村以外に奈良、大阪、有馬などのいわゆる毛筆産業に関係した人たちの名が刻記されています。

奉獻願主 孫居田正三郎

安政巳六末九月吉辰

奉寄進願主 渡辺勘三郎

安政六末九月吉祥日

奈良・秋田屋小兵衛、大阪・

楠本利兵衛、大阪・菱屋三兵衛、有馬・灰吹屋弥右衛門、

大阪・信濃屋善助、有馬・一文字屋与平、有馬・小田原屋庄三郎、有馬・江戸屋久兵衛、（神山神社境内南側の玉垣）

四歳天寿ヲ以テ終ニ逝ク（以下略）

昭和八年十一月

男 伊藤忠兵衛建立

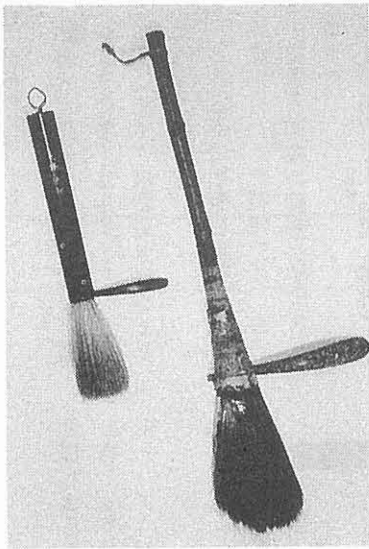
正五位 天野雨石

篆題謹并書

伊藤源兵衛翁の碑文（前文略）

二十一歳（安政二年）筆墨行商ヲ志シ遠ク九州地方ニ遍歴シ誠実ニ從ヒ深ク顧客ノ信頼ヲ得辛苦経常三十年一日の如ク糸銖ノ微尚之ヲ蓄ヘテ数百金ヲ得五十歳農ニ復帰シ晨ニ星光ヲ戴キ夕ニ日影ヲ踏ミ敢テ倦怠ノ色ナカリシカバ八十

熊野の毛筆産業発展の要因に毛筆元祖佐々木為次、音丸常太、井上治平の偉業もさることながら、誠実勤勉に芸州筆を行商した先人たちの労苦を忘れることは出来ません。



▲左 幕末の能書家

貫名海屋愛蔵の巻筆

右 白下部鳴鶴選定長鋒快劔
筆架は中国戦国時代の帯鉤